

話ならぬ



乃好なら好話



星新一

新潮社



つねならぬ話 はなし		一九八八年二月五日 印刷 一九八八年十一月一日 発行	著者 星 ^{ほし} 新 ^{しん} 一 ^{いち}	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮 社	〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 業務部 ☎(三三)五一一一 電話 編集部 ☎(三三)五四一一 振替 東京四一八〇八	印刷所 株式会社 光 邦	製本所 加藤製本株式会社	定価 一〇〇〇円
------------------------------	--	-------------------------------	--	------------	---------------	---	--------------	--------------	----------

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shin'ichi Hoshi 1988, Printed in Japan

ISBN4-10-319423-5 C0093

つねならぬ話

目次

やじれ神話

42

やじうま神話

32

海の神話

26

天空の神話

20

表紙の神話

15

風の神話

9

はじまりの物語
7

海の若大将

103

旅情

84

花も嵐も

67

もしかしての物語
65

光

149

鳥

145

雪

138

緑

132

川

128

壺

123

ささやかれた物語
121

挿画——西のぼる
装丁——東幸見

ブガン神話

50

しらけ神話

56

海

157

竹

160

鏡

166

筒

172

水

178

夜

182

寺

188

空

192

話

195

つねならぬ話

はじまりの物語

風の神話

ほんやりと、薄暗さだけがただよっていた。動くもの、なにひとつない。無意味な静止のままだった。だから、時間も流れない。

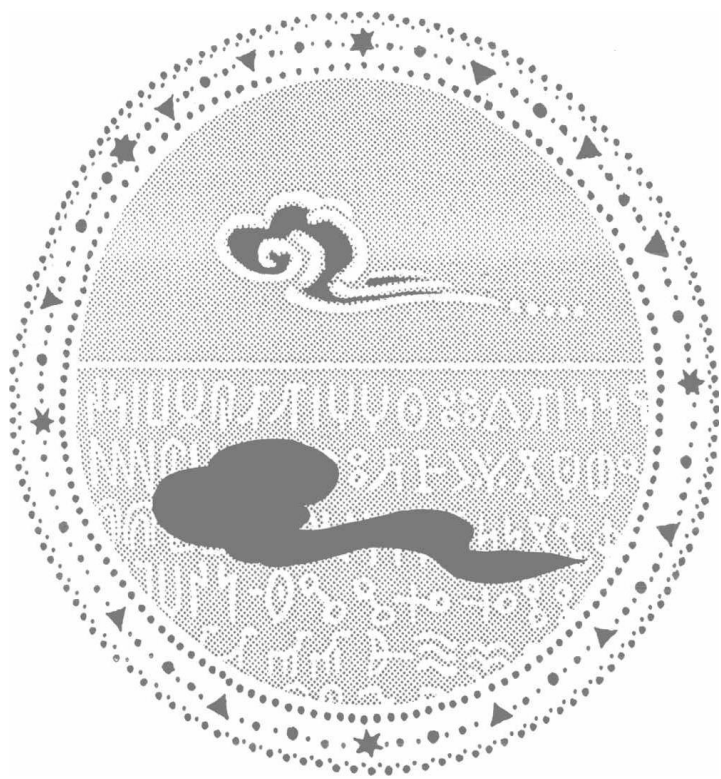
どこからともなく風が吹いてきて、天地をわけた。それが、すべてのはじまりである。天は上に、地は下にと存在するようになった。しかし、地上は平坦^{へいたん}で、遠くまで、な

にひとつない。ただ、風が動いているだけ。

時がたち、風は地面の上のカードと出会った。長方形で、薄いもの。風はそれを吹き上げ、空中を舞わせた。このようなものがあるからには、どこかに、これと関連のあるものがあるのではないか。

風に思考力があるわけではないが、長い長い時間は、それにたどりつかせる。小さな竜巻たつまきとなつてさまよい、カードはひらひらと舞いつづけた。そして、ついにそれを地上に見いだした。

もちろん、名称などない。しかし、はるかのちの言葉で形容するとなると、自動販売機といったあたりが、適当なのではなからうか。本質的には、はるかに神秘的なものだが。



風の力でか、カードが目ざめて意志を持ったのか、その一部に入りこんだ。

販売機の下の口から、水が流れ出し、川となって流れ、遠くまで伸びていった。それは、たまって海となる。海のはてから、太陽が生まれ、月も生まれた。

カチリといった音がした。水がとまったわけではない。その上の口から、植物の種子がこぼれて、水に浮いた。それは川岸に流れついて、育っていった。

時間は、いくらでもあるのだ。水にまざるものには、小さな魚もあった。それも育つ。

かくして、地上は緑になり、花が咲き、遠くで海は波を打ちはじめた。海にも魚がふえていった。

またカチリと音がし、上の口から何種もの鳥たちが、つぎつぎと飛び出していった。その下の口からは、ウサギ、ネコ、イヌ、ブタが出現した。

ネコはネコ科の動物、トラなどに分れる。イヌはイヌ科の動物、オオカミなどに分れる。ウサギは、コアラ、パンダ、テディ・ベアなどに分れる。

あとは、いちいち説明するのは大変だから、タヌキが化けていると思つていい。キリンだの、シマウマだの、ラッコだの、あんな奇妙なのは、普通じゃない。

タヌキとは、ウサギ、ネコ、イヌ、ブタの混血である。

正体がわかると、そういえばと感じる人も多はずだ。

まあ、そんなふうになったところで、自動販売機は、し

ばらく考えた。われわれの思考力とは、けたがちがうが、そのようなムードだったのだ。

おかしな音がし、それは二つに割れ、なかから少年と少女が出てきた。風は、やさしく祝福し、カードは使命を果たすと、別れを告げるように飛び去った。

割れた装置は、疲れはてたように、こなごなになって大地に散った。それを風が吹きあげ、星々となった。あとには、なにも残らぬ。

人間が今いるのは、これらの結果である。